

## 説教「主をほめたたえる喜び」

詩編 30 編 2～3 節、フィリピの信徒への手紙 2 章 6～11 節

2004.1.25

日本バプテスト同盟 東京平和教会

主の御名をまず、ほめたたえます。1 月の最後の主の日にお招きをいただき、御言葉を語る機会を与えられ、光栄です。ご出席の皆さんの上に、そのご家族の上に主の恵みの豊かにあるよう、イエス様の御名により祝福いたします。

今朝は、詩編30編を取り上げました。詩編には150もの詩がありますが、大ざっぱに二つに分けることができると言われます。人生で出会う様々な出来事の中で、困難や苦しみの中から「主よ、なんとかこの苦しみから救ってください」と切に呼びかけ訴える詩編と、他方、困難に直面して神に叫んだとき、神が働いて助けてくださったという喜びから、神をほめたたえる詩編の二つです。そして、それが人生の両極端であって、その他の一切はその中間に含まれると言えるのです。その中で、この30編は個人による主をほめたたえる歌であります。

30 編は、冒頭の 2 節で「主よ、あなたをあがめます」と賛美で始まり、終わりの 13 節で「わたしの神、主よ、とこしえにあなたをほめたたえます（感謝します）」と結ばれています。このほめたたえは、主が私に働いてくださったという出来事に対して発せられている喜びです。2 節に「あなたは・・・わたしを引き上げてくださいました」とありますが、「引き上げる」という動詞には、井戸の水を汲む器で綱を垂らして引き上げる、との意味合いの言葉が使われています。その意味は、4 節の「あなたはわたしの魂を陰府から、墓穴に下ることから救い上げてくださった」という言葉で明らかです。この詩人が直面した苦しみ、恐怖はどんなものか。死ぬほどの危険や不安や困難な出来事であったに違いありません。詩人は 3 節で「わたしの神、主よ、叫び求めるわたしを、あなたは癒してくださいました」と言っていますが、このように、主なる神が困っている私に働いてくださったと告白し証しすること、それが主をほめたたえていることなのであります。

この個人が救われた経験を、詩人は自分一人のものとはしないで、その出来事をおそらく、公の礼拝の場で証ししたのであります。ですから、5、6 節で、他の人々に呼びかけています。5 節では、「敬虔なる方々よ、主をほめ歌え、聖なる御名をほめたたえよ」と。実際、ここ 5 節で「感謝をささげよ」と訳されている動詞は、「ほめたたえる」と訳したほうが文脈にぴったりします。数年前、

『宣教』に「感謝か、ほめたたえか」という題で論文を書き、そこでこの問題を扱いました。これはドイツの旧約学者 ヴェスターマンによって明らかにされたものですが、原語の「ホーダー」という動詞は感謝するというよりもっと強い表現で、「感謝しても、感謝しきれない。神はなんと素晴らしいお方か、なんとすごい働きをなさることか」と言っ<sup>た</sup>て神を讃える、という意味です。反対に、感謝するという現代人の言葉は個人的な事柄になりやすい。そもそも、古代においては、感謝という独立した言葉は存在しなかったとも言われます。国語大辞典の中に、室町時代「ありがたい」というのは「法悦」の意味で、感激のほうに用いられ、「感謝」の意には「忝い」のほう<sup>かたじけな</sup>が用いられた、とあります。ドイツ語の "danken (感謝する、お辞儀をする、賞める、讃える)" が "denken (考える、思う、信ずる、判断する)" から、英語の "thank (danken と同じ)" も "think (denken と同じ)" から派生したことからも、これは分かります。

したがって、5 節は「主にほめ歌を歌え、聖なる御名をほめたたえよ」と訳せます。6 節は、直訳しますと「怒りは一時でも、慈しみは生涯にわたります」、6 節の後半は「泣きながら夜を過ごす人も、朝になれば喜びの叫びをあげます」となります。

旧約聖書「創世記」の「ヤコブ物語」の中で、ヤコブは、明日は兄エサウと会わねばならないとの不安から眠れない夜をおくります。そんな中、彼は、ヤボクの渡しで見知らぬ者と一晩中、格闘するのです。その格闘は「わたしを祝福してください」と明け方まで続き、ついには、その相手が実は神様であったと分かります。そして、ヤコブは格闘の中で足を痛め、足を引きずる結果となるのですが、そんなヤコブもまさに、神から祝福を頂いて歩き出したとき、朝日<sup>あざむ</sup>がその顔を照らしたとあります。これは、昔欺いてひどいことをした兄エサウと会うために、ヤコブが神からの祝福を求めた祈りの格闘であったと、私は解釈します。

実は、私がこの詩編 30 編を選んだのは、一つの経験があったためです。今から 30 年近く前のことですが、関東学院大学神学部が廃部となったとき、私は関東学院教会のフルタイムの牧師に迎えられました。職を失ったところを教会に拾ってもらった、と言ったほうが本当かもしれません。そのようにして牧師として働く中、私は、自分が教会を思うように運営していくことに力のないことや、満たされない鬱憤<sup>うっぷん</sup>といったようなものが内にあることを感じるようになりました。そんな頃でした。すでに天に召されましたが、宣教研修所の櫻井皓専任主事が計画して、日本バプテスト連盟と共同の教師研修会を天城山荘で開いたのでした。その時、私は、朝早く一人であの大きな礼拝堂で讃美歌を歌いたいと思いました。そして、どこか聖書を読みたいと思って開いたのが、詩編の 30 編だったのでした。大きな声でこれを朗読していると、その言葉が自分の心に響いてきました。後で、櫻井先生が私に「先生、大きな声で祈っていましたね。先生の邪魔をしたくないので、入のを止めました」と言っておられました。

当時は口語訳でしたが、5 節を朗読していくうちに、涙が溢れてきました。「その怒りはただつかのまで、その恵みはいのちのかぎり長いからである。夜はよもすがら泣きかなしんでも、朝と共に喜

びが来る」。さらに、7 節には「主よ、あなたは恵みをもって、わたしをゆるがない山のように堅くされました」と、また 10 節には「主よ、聞いてください、わたしをあわれんでください」とありました。こうして主をほめたたえていると、心が爽やかに<sup>さわ</sup>なり、新しい恵みと力が与えられたことを、私は思い出すのであります。

と同時に、「しかし、わたしは・・・」と、6 節（新共同訳 7 節）は、原文ではそのように始まっています。すなわち、神の恵みによって事がうまくいくと、「わたしはもう大丈夫」と、得意になってしまう時がある。そのように有頂天になっていると、そんな時、神様に信頼することを忘れがちになるといなのです。「自分の力でやれる！」と。ところが、7 節（新共同訳 8 節）の終わりで主が御顔を隠されると、途端に失敗し、不安になってしま<sup>みかお</sup>う。この詩人は、反省を込めて、不信仰であった自分を告白するのです。

次に 10 節に注目していただきたいのですが、「人は死んでしまつては、墓に下つてしまつては何にもならない。塵になつたらどうして、神をほめたたえ、神の真理を告げ知らせることができるでしょうか」と、詩人は言います。つまり、死の世界に行つてしまえば、神との交わりが断たれてしま<sup>ちり</sup>う。逆に言えば、今生きていてこそ、神をほめたたえる喜びがあり、生きる喜びがあるのだ、といのです。主をほめたたえるということは、自分が生き また生かされている証しだということです（4 節）。旧約には、（イザヤ書、エゼキエル書には一部 見られるものの）復活という考えはありません。主は陰府の中にいる者を慰めようがない、といのです。

最後に、ほめたたえる元になっている神が個人の生活の中に働いてくださったということ、神のその奇跡的な働きのことを締めくくつたのが 12、13 節であります。「あなたは嘆き（原語は「喪服」）を踊りに変え、粗布<sup>あらぬの</sup>を脱がせ、喜びを帯としてくださいました（同「喜びの帯を締めさせてくださいました）」と。すなわち、「最低の悲しみを最高の喜びに変えてくださった（絶望を希望に変えてくださった）神よ、あなたが働きかけて、この驚くべき転換を起こしてくださいました」と、神の業を讃えるのです。このように、「神が歴史に働いて、絶望の中に沈んでいた私を引き上げ、喜びに溢れさせてくださった。なんと、神の御業は素晴らしいことか」と証しする。それが、主をほめたたえるということでもあります。

聖書に出てくる物語や出来事に、こうした逆転劇を見てみましょう。旧約のエステル記に、ハマンというペルシアの高官が登場します。ハマンは、宮殿の門衛をしているユダヤ人のモルデカイが自分が通るときに平伏して挨拶しなかつたことに腹を立てます。そして、モルデカイだけでなく、その民族のユダヤ人をも皆殺しにする勅令<sup>ちよくれい</sup>を皇帝に願ひ出、その発布を認められます。一方、エステルはモルデカイの養女で、しかも、王（皇帝）のお気に入りの妃<sup>きさき</sup>でもありました。そこで、モルデカイはエステルを通し、ハマンの悪巧みを打ち破るという物語ですが、その中で逆転劇が起こります。それは、モルデカイを吊すために、ハマンがポール<sup>つる</sup>を用意する。ところが、エステルの訴えで、皇帝

はハマンを処刑することになり、ユダヤ人モルデカイを吊すために自分が立てたそのポールに、ハマ  
ン自身がかけてらる、という逆転劇でした。

しかしながら、聖書に記されている最も大きな逆転劇は何でしょうか。それは、イエス様の十字架  
の死と、葬りの後の墓からの復活ではないでしょうか。このような劇的な出来事を通し、神が歴史の  
中で救いを示してくださっています。フィリピの信徒への手紙 2 章 6～11 節は「キリスト賛歌」と  
言われますが、それはこのためです。天に<sup>とど</sup>留まって、栄光の内にもできたお方が御自分を  
空しくして人となり、しかも神の<sup>しもべ</sup>僕、苦難の僕となられた。そのようにして、人の罪を背負って、  
罪と一緒に<sup>みづか</sup>自ら死ぬことにより、罪を滅ぼされた。そして、死から神の御許に<sup>みもと よみがえ</sup>甦らせられたので  
あります。死ぬことにより死に勝利するという見事な逆転劇を通して、救いを成し遂げてくださいました。  
それ故、主をほめたたえることができるのです。

今朝は、私の貧しい経験を織り交ぜて、詩編 30 編を御一緒に学びました。人生の中で出会う様々  
な出来事を通して、詩編は私たちに慰めと力を与えてくれます。主なる神、イエス様がいつも共にい  
まして支えてくださることを信じ、どんな時にも主をほめたたえて主に仕え、教会の兄弟姉妹に仕え、  
共々に賛美しつつ、主を証しする者になりたいものです。